

# コモリンピック (Commolympic) でつながるWA

コモリンピック (Commolympic)  
河野 修治<sup>1</sup>・宮本 史朗<sup>2</sup>・三池 史子<sup>3</sup>  
<sup>1</sup>新町・古町町屋研究会  
<sup>2</sup>ささえりあ武蔵塚 管理者  
<sup>3</sup>熊本大学 政策創造研究教育センター 政策研究員

人口減少社会への突入に代表されるような社会構造の転換期において、我々は東日本大震災という未曾有の大惨事を経験したことにより、これまでの価値観が明らかに変化しており、改めて「人と人のつながり」を再構築することが求められている。

本提言では、住民活動の最小単位である各地域での活性化運動を基に、その動きを市域に展開するための政策を提言する。具体には、高齢者を地域という舞台に導くために、地域住民が参加する文化活動やスポーツ等を競うステージを設け、校区-区-市と段階的な大会を開催する。また、その会場として、地域に点在する空き家を活用することで、地域の協力を得た新たな空き家対策の仕組みを創出する。

## 1. はじめに

### (1) コモリンピック (commolympic) とは

コモリンピック (commolympic) とは、以下の意味を含む造語である。

#### ① オリンピック

五輪を、政令指定都市への移行により誕生した五区の輪になぞらえた。

意図：コンクールや競技等を通して、各区住民が参加し、得意分野で競い合うことで、自身の誇りからこれまでになかった区民としてのアイデンティティが醸成され、区としての結束力を高める。

また、テーマに掲げた「WA」は、輪、和、環、話、湧を意味する。

意図：5つの「WA」は、人と人のつながりを再構築することで成就させる目標でもある。

輪（五区の輪を築き、人と人がつながる）

和（互いに相手を大切にし、協力し合う）

環（地域資源を循環させ、生活環境を保全する）

話（会話が生まれ、人と人のネットワークが派生する）

湧（地域の個性化で、個人の生き甲斐が湧く）

#### ② 2つのコモ「com・m」

community：地域

人と人のつながりを形成するためのソフト的な仕組みづくりを目指す。

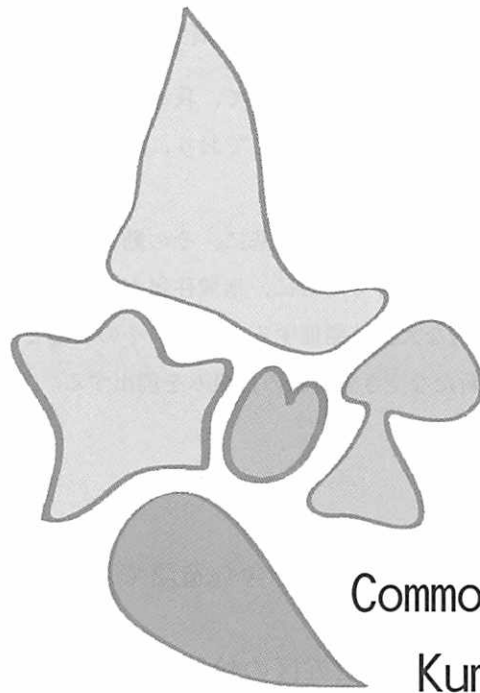
意図：都市化と共に人間関係の希薄化が指摘されてきたが、必ずしもムラ社会に戻すのではなく、現代にあった支え合いの社会を「地域」という単位で再構築することが重要である。井戸端会議のような身近なところで生まれるコミュニケー

ションの仕組みと地域の個性化が、MICEのような多種で広域的な交流につながる足がかりとなる。

common：共有の、社会全体の

地域の共有財産を形成するためのハード的な場づくりを目指す。

意図：自分の居場所が「家」か「施設」かではなく、また公園のような公共空間でもなく、みんなが立ち寄り使える共有財産的な「場」として、高齢者が歩ける範囲に点在させる。気楽に仲間と過ごせ、あるいは世代間交流が自然に生まれる笑顔あふれる「場」を提供する。



全体で熊本市の五区を表している。  
中央区は支え合いでつながるハートを、  
西区は澄んだ空気に浮かぶ星を、  
東区は、豊かな自然と地下水を、  
南区は自然の恵み・雫を、  
北区は未来にはばたく力強い羽を  
イメージしている。

図-1 コモリンピックのシンボルマーク（仮）

## (2) 本提言の政策担当省の範囲

本稿での政策提言は、高齢者福祉、子育てに対する厚生労働省系の政策と、空き家に対する国土交通省系の政策を含む。

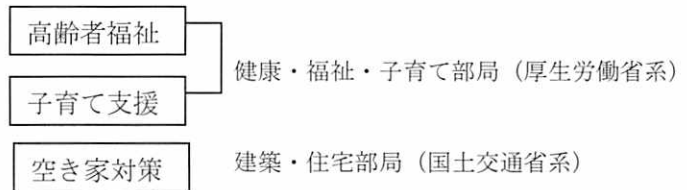


図-2 政策担当省の範囲

## 2. 問題・課題

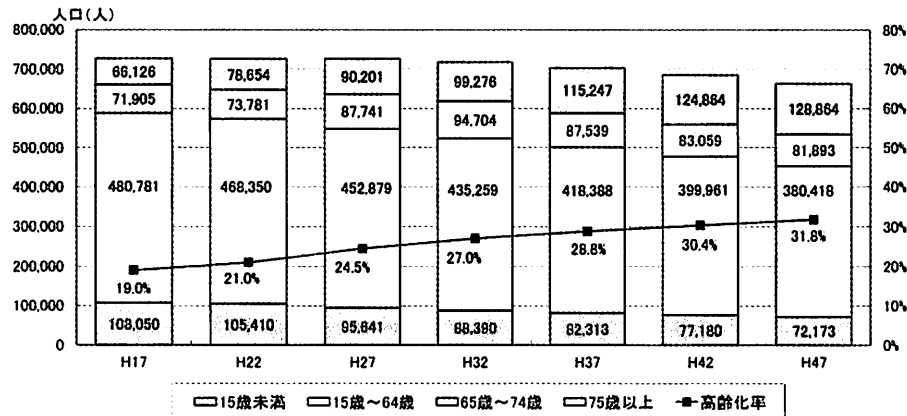
### (1) 高齢者に関する背景と問題点の把握及び課題の抽出

#### a) 背景

熊本市の人口動態は、我が国のトレンドに反せず高齢化が進行しており、今後もその傾向が続くと予想されている<sup>1)</sup>（図-3）。

厚生労働省は、高齢者が住みなれた地域で安心して暮らし続けられるよう、地域包括ケアシステムの構築を提唱し、高齢者の健康増進や介護予防のための活動を地域包

括支援センターを中心に展開している。この「地域包括」の考え方は、福祉の現場でも少しずつ浸透してきており、熊本市内においても関係各者が同じテーブルにつき検討・実践する機会が増えてきている。



※H17以前は合併前の旧市町の合計値(以降、同じ)

図－3 熊本市の人口推計（H22まで国勢調査、H27以降は熊本市推計）

## b) 問題点

高齢者の数が増加するなかで、人口構成比のバランスからみても、あるいは高齢者福祉のサービス供給面からみても、単純に「高齢者」としてひとくくりにできない状況であり、様々な問題が存在するようになっている。

例えば、

- ア) 最近ではかなり身近な現象になってきている高齢者の孤独死問題。
- イ) パートナーとの死別後の高齢者のひきこもり問題（2010年の国勢調査によると、熊本市の全世帯の8.8%にあたる26,693人が高齢単身世帯である）。
- ウ) さらに子ども世帯と同居でも昼間独居の高齢者が存在する。
- エ) 2012年に熊本では白川水害を経験し被災時要援護者名簿が整備されたものの、人とのネットワークから外れている高齢者の対応ができない。
- オ) 2015年の介護保険制度の改正では、「要支援」を介護サービスから切り離すことが検討されているが、フォローに関する具体的な検討はこれからである。

このような問題点を鑑みて、本稿では、特に高齢者が親族や地域との関わりを持たなくなる「社会的孤立」に着目する。

## c) 課題

増加する高齢者が、生き甲斐をもって生活できるような環境を整えることが必要であり、さらに非常時にも支援を享受できる体制づくりが求められる。そのために、居住地である地域のなかで社会と関わる機会を創出し、かつ歩行可能な範囲で実践することで、日常的なコミュニケーションの促進を図ることが重要である。

## (2) 子どもや親に関する背景と問題点の把握及び課題の抽出

### a) 背景

最近の子ども達は、習い事で忙しいという時間的な制約があったり、近年の道路事

情や公共空間の脆弱性等から、地域で遊ぶことが減ってきているのが現状である。また、核家族化や、季節行事・伝統行事等が略式化されるなどの社会的な背景から、様々な経験の機会が減少している。

熊本市では、市内20ヶ所に「子育て支援センター」を設置し、育児相談、親子の遊び場、育児講座、情報提供、地域との交流等に取り組んでいる。データが古いが平成17年時点で7施設の総利用者数が39,592人であり、そのうち総合子育て支援センターが2万人を超え大半を占めている（平成17年熊本市子育て支援課）（図-4）。つまり、その他の施設の利用者数は1,000人から4,000人台であり、広域的ではなく、近隣施設として利用されていることが推測される。

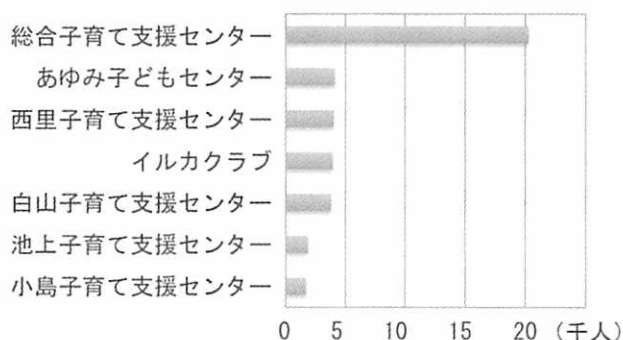


図-4 熊本市の子育て支援センター利用者数（H17年）

#### b) 問題点

熊本市では、子育て支援センターも含め、地域の公民館や保育園などで、子ども向けの様々なイベントや育児サークル等が開催されているが、駐車場が限られていたり、公共交通の利便性が悪く、子連れでの移動が困難で参加したくても参加しにくい側面がある。

このような問題点を鑑みて、本稿では、子育ての場所が近隣に欠如していることを問題点として認識する。この場合の近隣とは、校区に1施設という定義ではなく、駐車場がなくても、子どもを連れて徒歩もしくは自転車で行きたくなる距離を意味する。

#### c) 課題

未就学児の子育て世代には、ベビーカーを押して歩いて行けるような身近な場所に気軽に参加し活動できる場が求められている。就学児の子育て世代には、子ども達が地域内で遊び経験できる場が求められている。

概して、地域のアイデンティティを継承しつつ活動することが重要な要素であり、子ども達が遊び感覚を通して学習し育つことができる環境を整えることが必要である。そのためにも知的資源である高齢者と交流し、様々な暮らしの知恵や伝統を受け継ぐ場が求められている。逆に高齢者にとっては、このような場が生き甲斐にもつながる増加する高齢者が、生き甲斐をもって生活できるような環境を整えることが必要であり、さらに非常時にも支援を享受できる体制づくりが求められる。そのために、居住地である地域のなかで社会と関わる機会を創出し、かつ歩行可能な範囲で実践することで、日常的なコミュニケーションの促進を図ることが重要である。

### (3) 空き家に関する背景と問題点の把握及び課題の抽出

#### a) 背景

冒頭で触れた社会構造の転換に伴う影響のひとつに空き家の増加が挙げられる。2040年の空き家率が最大で43%となる試算もある。<sup>2)</sup> 熊本市は、空き家総数45,850戸のうち「賃貸用」「売却用」「二次的」住宅以外の「その他の住宅」が12,230戸ある。さらにそのうち「腐朽・破損なし」の住宅が8,820戸、「腐朽・破損あり」が3,400戸となっている（図-5）。

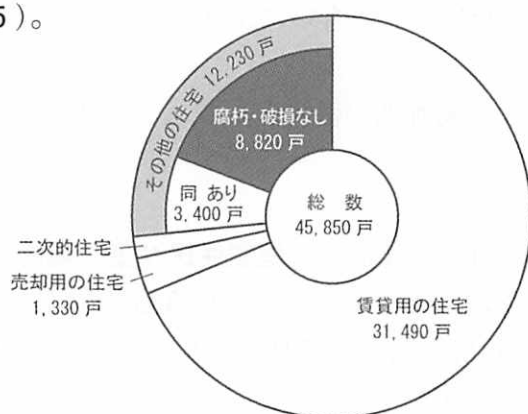


図-5 熊本市の空き家の種類、老朽・破損の無別空き家数（H20年 住宅・土地統計調査）

空き家は適性に管理すれば地域資源となり有効活用の可能性を見い出せるが、放置すれば不審火や不法占拠、ゴミ屋敷等を心配しなければならない負の資産となる。

熊本市は「熊本市老朽家屋等の適正管理に関する条例」を制定し、平成26年4月から施行されることとなったが、空き家が負の資産となる流れを荒廃状態に陥る前に抑止しなければ、老朽家屋等の大量発生につながりかねない。

#### b) 問題点

放置されている空き家の家主にとって、賃貸することの問題として、

- ア) 荷物がある（特に仏壇は問題）。
- イ) 貸すには改修費がかかる。
- ウ) 貸したら戻ってこない。
- エ) 経理が面倒等の意識があり、逆に空き家の状態を維持しても、
- オ) 風通しや庭の手入れの手間がかかる。
- カ) 固定資産税や火災保険等の費用がかかる等の問題を抱えている。

このように空き家があっても活用できる状態に持ち込むための打開策が見い出せていないことを鑑み、本稿では、特に高齢者が施設に転居されたりお亡くなりになった後、賃貸市場に出ておらず、実質的に使われていない状態にある空き家に着目する。

#### c) 課題

空き家は、地域資源として有効活用されることが望ましい。空き家のなかでも賃貸市場に出ているものは一定の管理下におかれているため、空き家対策としては、使える住宅を放置せず有効活用することが重要である（引いては前述した条例による荒廃家屋に対する手続きや解体費等の公的負担を低減することにもつながる）。

あわせて、不動産という個人的な資産が、実は地域に役立つ財産であるということ  
を広く認知できるかがカギである。

### 3. 目的等

#### (1) 将来の目標像

本提言の先にある目標像は、今後も進展する高齢社会において、高齢者が住み慣れた  
地域でいきいきと暮らし、地域の支え合いにより安心して生活できる住環境を達成する  
ことである。

このような目標に向かった初動期の活動として、以下の通り提言の目的を設定する。

#### (2) 提言の目的

##### a) 積極的に参加する動機付けを仕掛け、地域住民が集う場を創出する

住民が集う機会自体を増やすことは交流という意味で有効であるが、本提言では、  
「社会的孤立」の防止を視野に入れ、孤独的に生活している高齢者に対して動機付け  
を行い、積極的に地域という舞台に登場していただくことが目的である。

よって、慣例的な祭り等のイベントを多発する趣旨ではなく、高齢者が身近な場所  
で仲間と楽しく交流し、さらに自身の個性を表現する場があることで、地域とかわ  
ることに意欲が湧いてくるような内容を提案する。

##### b) 住民参加型の運営の可能性を引き出す

サステイナブルな地域社会を形成するには、地域のための地域による自主的な管理  
運営体制の確立が必要であり、住民参加型の運営の可能性を明らかにすることを目的  
とする。

よって、慣例的なイベント企画や従来不動産管理手法に留まらず、住民が主体と  
なって参加しうる方法論を提案する。

##### c) 空き家の有効活用をシステム化する

一般の不動産流通の手続き過程に、新たに空き家利用のケースを追加し、空き家活  
用を促進する道筋を見い出すことが目的である。(無論、既存の不動産業界の秩序を  
侵害するものではない)。よって、実質的な放置状態から、一時利用を経て、有効活  
用される展開を導き、空き家が円滑に循環する方法論を提案する。



図一六 実際に空き家を補修後、活用した事例

## 4. 提言内容の根拠・検証（方法と結果）

### (1) 「場の創出」の有効性

各地で開催されている高齢者向けサロンは、内容も充実しており参加者から好評を得ている。最近では、元気な高齢者を対象とした体操等も増えており、集うことの重要性、さらには体を動かすことの健康的な意義が実証されている。

提言内容の根拠としては、①既存催事への参加者が固定化しているため、孤立傾向にある高齢者が地域に参加いただけるきっかけ（動機付け）が必要であること、②コミュニティセンターや公民館等では、歩いて参加するには距離的に遠くになってしまう高齢者があり、また子育て世帯も同等の理由により、設は校区内に点在するほうが望ましいことを確認した。<sup>3)</sup>

### (2) 「地域参加」及び「主体性確保」の有効性

地域主催のお祭りやイベント等は、その開催数や人手も多く、地域住民の交流の場となっていることから、地域に根ざした活動が住民等に指示されることは実証済みである。また、校区社会福祉協議会主催の事業や自治会主催の運営手法等も新たに現れている（紙面の都合で詳細な事例の記述は省略する）。

提言内容の根拠としては、①今後の良好な暮らしを維持するには、人と人とのつながりがより一層大事になること、②旧態依然とした催事にとっての転換期であり、住民が主体性を持って参加できる仕組みづくりが必要になっていることを確認した。<sup>3)</sup>

### (3) 「空き家活用」の方法

平成24年度の熊本市居住支援協議会の主催による持家空き家を利用した住み替え事業が、中緑校区の住民参加による手法で成功している。その後も地域主体で空き家のマッチングに成功しており、ここでの空き家を活用するノウハウを一般解として応用することが可能である。

中緑校区における住民参加手法の例

- ・ 空き家の情報収集
- ・ 家主との話し合い（交渉）
- ・ 空き家の清掃、管理
- ・ 入居者のマッチング
- ・ 地域の不動産会社による仲介



図一 7 空き家を清掃する地域住民

## 5. 提言内容

### (1) 熊本版オリンピックの開催

地域に点在する近隣の会場で校区大会を実施することで参加者が増え、競らしさも実現される。引きこもりがちだった高齢者が腕自慢に登場する機会を創出するとともに、

子ども達の参加も促し楽しい雰囲気づくりに努める。

区大会、市大会等で他の地域と競うことは、自地域内の結束力、団結力が増し地域力が向上する。これまでになかった「区」という単位で人々が協力し合うことで「区民」意識が醸成され、地域特性の形成につながるとともに、市全域の連帯感にもつながる。

## (2) 競技種目

競技種目は、少しずつ増やしていくことを想定する。つまり、競技種目自体を住民参加の場で検討し、実現可能な範囲で決定する。但し、本提言の趣旨は、健康増進や参加者同士の交流を目的としており、そのイメージを付記すると、①スポーツ部門として健康体操、ウォークラリー、ストローサッカー等、②文化部門として校区カルタ、囲碁・将棋等、③舞台部門として合唱・合奏、ダンス、寄席バトル等が考えられる。

## (3) 参加方法

本提言の趣旨に従えば、個人参加のほか、仲良しグループによる団体や親子ペア、あるいは普段の接点が少ない高齢者と小学生ペアやご近所ペア等、ユニークなペアリングを部門化し受け入れることに意義がある。

## (4) 開催時期

地域住民が参加する「校区大会」は毎年、校区の代表者が参加する「区大会」は2年に1回、区民の代表者が参加する「市大会」はオリンピックと同じ4年に1回を想定する。

## (5) 会場

### a) 校区大会及び区大会、市大会会場

校区大会は、原則、地域内の空き家を利用するが、地域が認める「地域の宝」であれば会場として利用する。例えば、お寺やその境内、公園や史跡等が考えられ、「地域が認める」とは、地域住民で定期清掃を実施していること等の基準を設ける。普段から使われている身近な集会所等も許容する。

区大会と市大会においては、一定の収容能力のある公共施設の利用を想定するが、安全な大会を開催することを前提に校区大会の会場利用を推奨する。

### b) 持続可能なレガシー（空き家の管理から活用へ）

大会会場として利用した「空き家レガシー」は、引き続き適性管理すると同時に有効活用できるように家主との交渉を継続し、地域の活動拠点あるいは住み替えの対象物件として新たな利用を図っていく。日本の社会背景からいけば次々と誕生する空き家レガシーを、次々と地域の財産に変換していく取組を継続する。

## (6) 運営

### a) 住民参加による運営母体の形成

過度な負担を避けるため、できる人ができる範囲の行動を起こす精神で、地域住民が楽しみながらかつ自主的に参加できるよう各地域の特性に応じて取り組む。



また、地域包括の意義に基づき、関係する専門家が参加する。例えば、医者や看護師による救護班や福祉施設による送迎のほか、学生の実習ボランティアも考えられる。

#### b) 初動期の進め方

初動期においては、大綱を定め全校区一斉参加を目指すのではなく、参加いただける校区间で連携を図りながら、少しずつ参加希望の校区を増やしネットワークを拡大していく。

また、初動期の機動性を活かせるうちに、運営の骨格づくりを強化する。その後、やりながら臨機応変にルールを定めていく方法が、継続するための秘訣である。

#### c) 広報

広報は様々な手段で幅広く実施することが望まれるが、ここでは高齢者向けの対策を特記する。まずは、この取組を知っていただき参加していただくために口コミで誘い合い参加者を増やす。70～80代の高齢者を参加誘導するために、50～60代が楽しい雰囲気を作り出しながら声かけする。賛同いただいた自治会長から老人会に向けて「メダルをとりましょう！」とアピールしてもらうことも考えられる。

#### d) 空き家の管理

空き家が出た場合は、家主にコモリンピックの趣旨を伝え、会場としての利用について理解を求めることを試みるのが地域住民に期待される。

準備段階での清掃等の管理は地域住民が行い、会場設営は競技関係者やボランティアで実施する。

### (7) 支援施策

#### a) 大会運営事務局支援

特に初動期においては、実施経験のあるイベントのノウハウや、人材の紹介等における支援が望まれる。

#### b) 広報支援

趣旨の伝達と幅広い参加を実現するには広報手段が重要であり、市や県をはじめ主要な公共公益団体は、ホームページや紙面での広報、チラシの設置・配布等について支援する。

#### c) 空き家支援

地域住民が空き家に関わる際に、アダプト制度を応用し、清掃道具の配布・貸出や活動中の損害保険の適用等を支援する。

また、家主に対しては、大会会場として使える状態にするまでの必要最小限の改修（廃棄物の引取やインフラの復旧等）を支援する。

## 6. 考察

### (1) 期待される効果

#### a) 直接的な効果

- ・ 前述の3つの目的が達成できれば、住民参加型の運営による持続可能な取組として、人々が集う場を提供できるようになる。その過程で、負の資産となりえる空き家を地域の財産として活用できる仕組みを形成することが可能である。
- ・ 多世代が趣味を持ち仲間と活動することでコミュニケーションの輪が広がり、高齢者の引きこもりの防止や、子ども達の経験の場の創出につながる。
- ・ 大会会場として利用した空き家が、大会後に定期的な活動拠点としての活用につながれば、交流の場が創出され、日常的な見守りや非常時の援助体制づくりへの効果も期待される。

#### b) 2次的な効果

- ・ 普段は訪れないような色々な地域に出向くことができ、地域間の交流につながる。子ども達にとっては異なる環境に触れることは貴重な経験となる。逆に、優れたノウハウを持っている他地域の方を招き情報提供を受けることで事業促進の糧となる。このようなネットワークづくりは、地域包括ケアシステムの実現に寄与することが期待される。
- ・ 練習に集まることでその場を借りて、介護予防や高齢者の困りごと対策等の出前講座を行うきっかけとなる。
- ・ ボランティア育成や傾聴ボランティア登録等の好機となる。また、子どもと高齢者のつながりは、ジュニアヘルパーとしての見守り機能の役割も果たすことができる。

### (2) 実現可能性

実現の可能性は十分にある。少数の校区や種目でもいいので、フレ開催としてとにかく着手することが重要である。改善を加えることで良質な取組となり、新規校区を受け入れることでネットワークが広がり、充実した取組となる。

空き家は1年に1回の大会利用から、大会後の月に1回のサロン利用の段階では、地域による清掃等の管理を行う。具体には、大会時は自治会が中心に、サロン運営に移ると社協等による取組が想定される。この随時利用の間はオープンハウスの意味合いもあり、最終的に住み替えによる新住民の受け入れまで達成できる可能性がある。

### (3) 初動期における課題とその対処方法

#### a) 実行メンバーの人選と行動計画の誘導

行動力のある若手メンバーを中心に、自治会等が後援しながら、事業の骨子を企画立案する必要がある。各区役所が接触している地域の人材に関する情報を提供いただきながら実行委員会を結成し、地域間の連携を図ることができる状態を整える。

#### b) 使用可能な空き家の発掘

空き家を地域の財産とみなすこと、ここではコモリピックの会場になること、その後地域の活動拠点になる可能性があることがインセンティブとして働くことで、地域と

家主の協力を得ることが必要である。

**【参考文献】**

- 1) 熊本市、2012、「熊本市居住安定確保計画」
- 2) 植村哲士・宇都正哲、2009、「人口減少時代の住宅・土地利用・社会資本管理の問題とその解決に向けて（下）2040年の日本の空家問題への対応策」、野村総合研究所
- 3) 複数校区の社会福祉協議会会長、民生委員児童委員協議会会長、自治会長、地域包括センター、子ども劇場へのヒアリング、2013

DEVELOPING MANY KINDS OF LINKS THROUGH “COMMOLYMPIC”

Shuji KAWANO, Shiro MIYAMOTO and Fumiko MIIKE

In a turning point of social structure as typified by depopulation, with the experience of the Great East Japan Earthquake as an unprecedented disaster, traditional people's values have clearly changed. Again, there is a need for reconstructing a connection between people especially after the disaster.

In this paper, we propose “Commolympic”, a citizen-oriented Olympic games based on efforts for revitalization in each neighborhoods as the smallest unit of the residents' activities. In detail, in order to lead elderly people to the stage of Commolympic, it will set up the stage for them to participate the community-based competition in cultural and sports activities, and hold the tournament or competition from the level of school area, district to the whole city in a stepwise manner. In addition, Commolympic will use vacant houses dotted in the community as a venue, and it can expect to create a new mechanism of measure to use these vacant houses working with local communities.